



地元向けの本醸造から純米酒、大吟醸と酒通も一目おく菱屋酒造の酒。酒造りを取り仕切る南部杜氏の辻村勝俊さんは「化粧をしない酒」を信条に、麹や米など素材の持ち味を壊さない無濾過での酒造りにこだわる。平成27年度の「現代の名工」にも選ばれた。



宮古市
MIYAKO

株式会社菱屋酒造店

【いわて産業振興センター活用事例】 設備貸与制度などを利用

代表取締役社長
斉藤 鉄郎

江戸時代末期の嘉永5年(1852)に創業した、宮古市の菱屋酒造店。酒蔵のある鉾ヶ崎の湧水と県産米のみを使って仕込まれる銘柄「千両男山」はどっしりとした旨口で、地元では親しみを込めて「ひっさの男山」と呼ばれ愛されてきた。震災では、宮古市内で最も被害の大きかった鉾ヶ崎地区に立地していたため木造2階建ての母屋は全て流出し、仕込み蔵も1階天井まで津波が押し寄せた。しかし4月に50ケース分の酒が発見され、6月には貯蔵タンクの無事も確認。「震災を乗り越えた奇跡の酒」として

販売され、瞬く間に完売した。

鉾ヶ崎地区の復活のシンボルでもある同社。市はもとより被災地応援ファンドからの支援なども受け、再開準備は同年8月末にはスタートした。まずは酒蔵の工事、それと同時に酒造りにも着手。「翌年1月4日の宮古市新年交賀会への出荷が目標だった」と、斉藤鉄郎社長は振り返る。酒造機械の手配から仕込みにと奔走したのは、同社の辻村勝俊杜氏。この道60年、あの青森の銘酒「田酒」を世に送り出した「純米酒の神様」だ。不断の努力で仕込み、出荷した生酒は「ま

さか男山が飲めるとは思わなかった」と交賀会の参加者を感じさせ、男山復活を強く印象づけた。

昨年の出荷数は、震災前を上回る110%を達成。盛岡そして県外からの引き合いも増えており、「外へも発信していかなくては」と斉藤社長は小売店への販促、震災を機に繋がった個人客へのアプローチにも力を注ぐ。もちろんベースにあるのは「酒は飲んで旨いと思うかどうか」と語る辻村杜氏の酒造りへの絶大な信頼だ。地元から全国へ、「男山」の評判は広がっている。

宮古復興のシンボルから
全国でも愛される日本酒へ

企業データ

会社名 株式会社菱屋酒造店
本社 宮古市鉾ヶ崎下町5-24
電話 0193-62-3128
代表者 斉藤 鉄郎

創業 嘉永5年(1852)
従業員 7名
業種 日本酒の製造、販売
URL <http://homepage3.nifty.com/hisiya/>